

おしのやかた
押野館跡

押野館跡は、室町時代の富樫氏の一族の館であり、館野小学校の東側一帯にありました。

館主は1335年（建武^{けんむ}2）、加賀国守護となった富樫高家^{たかいえ}の弟家善^{いえよし}で、「押野殿^{おしのどの}」と呼ばれていました。

1811年（文化^{ぶんか}8）頃、加賀藩士湯浅玄斎^{ゆあさげんさい}は、『押野館跡絵図』を描いて、当時の館の状況についてまとめています。絵図によると、大きさは東面49間（約88m）、南面56間（約102m）、西面87間（約158m）、北面27間（約49m）、東北面45間（約82m）でありました。

近年の発掘調査から、館の周りを囲む大きな堀や、掘立柱建物、井戸などを確認し、14世紀代を中心とした土師器皿^{はじきさら}や瀬戸焼壺^{せとやきつぼ}、加賀焼甕^{かがやきかめ}など、当時の生活道具が見つかりました。